

## 曲の背景を知って、名曲を味わおう。

### 「レクイエム」から「ラクリモサ(涙の日)」 モーツァルト 1756~1791 古典派 オーストリア

「レクイエム」とは、「死者のためのミサ曲」の通称である。ミサ曲とは、キリスト教の典礼に用いられる音楽の一種。この「レクイエム」は、モーツァルトが死の床で書き続けた未完の大曲。依頼主は、ヴァルゼックという伯爵で、彼は大の音楽好きであったが、名の知れた作曲家に作品を依頼しては、自らの曲として発表するという奇癖の持ち主であった。彼の妻が亡くなり、ヴァルゼックはモーツァルトには、自分の名前を明かさずに、モーツァルトに「レクイエム」の代作を依頼する。しかし、モーツァルトは完成させることなく、1791年12月5日オーストリアのウィーンでこの世を去った。モーツァルト35歳の亡骸は、厳寒の中、葬儀に参列する者もなく共同墓地に埋葬され、その場所も遺骨も未だ行方不明である。

この「ラクリモサ(涙の日)」は、「レクイエム」の第3曲・第6部にあたる。モーツァルトが書き残したのは、冒頭2小節間の第1ヴァイオリン、ヴィオラ。その他、第3小節から第8小節の混声四部合唱と通奏低音(オルガン)のみである。8小節目で絶筆となった後、弟子のジュスマイヤーが補筆して完成させている。「レクイエム」は典礼文に沿って、作曲されるのが慣習で、「ラクリモサ(涙の日)」は、「イエスよ、彼らに安息をお与えください」という部分である。

#### Lacrimosa (涙の日)

罪人として裁きを受けたとしても蘇ることが出来るように、と祈る言葉。

Lacrimosa dies illa,  
涙が溢れるような日 その

その日は涙あふれる日

qua resurget ex favilla,  
の時 蘇る から 燃える灰

燃える灰の中からよみがえるだろう

Judicandus homo reus.  
裁きを受けるべき 人 罪人

裁きを受けるべき罪人は

Huic ergo parce Deus.  
その人 なので 許す 神

その者をお許してください、神よ

Pie Jesu, dona eis requiem  
慈悲深き イエス 与える 彼らに 安息を

慈悲深き主イエスよ、彼らに安息を与えてください

### エチュード ハ短調「革命」 ショパン 1810~1849 ロマン派 ポーランド

エチュードとは演奏技術の向上のために書かれた曲のことをいう。ショパンは、ポーランドの首都ワルシャワの郊外で生まれた。父はフランス人で母がポーランド人である彼の文化的背景には、フランス人とポーランド人との国民性が備わっているといえるだろう。また、彼の作品はピアノ曲が主であったことから「ピアノの詩人」といわれる。ショパンは、それぞれ12曲からなる「練習曲作品10」と「練習曲作品25」の2つの練習曲集を作曲している。当時、ピアニストとして成功するためには、ピアノ協奏曲を自作自演し認められることが必要であった。しかし、この練習曲が協奏曲の技巧的な練習のために書かれたかどうかは定かではない。とはいえ、20歳の頃から完成度の高い作品を書いており、「別れの曲」「木枯らし」「エオリアのハープ」といった愛称を冠された曲もあり、広く親しまれている。この「革命」の愛称で親しまれる「練習曲作品10」の

第12番は、**Allegro con fuoco** アレグロ・コン・フォーコ（速く、情熱的に燃えるように）、ハ短調、4分の4拍子、三部形式で書かれている。祖国ポーランドがロシア軍により侵攻されたとき、ショパンが愛国心にかられ、作曲したといわれるが定かではない。彼のピアノ曲の中でも特に有名で、第1部・ハ短調→変ロ長調、第2部：嬰ト短調→ハ短調、第3部多くの転調を含むハ短調という目まぐるしい転調の上、情熱的な左手が憤りを表すかのように切々と訴えかける。なお、この「革命」というタイトルは愛称であり、ショパンによるものではない。ショパンは、多くのピアノ独奏曲を作曲していることや作品の曲想から「ピアノの詩人と呼ばれている。

## 「アランフェス協奏曲」から第2楽章 ロドリゴ 1901~1999 現代 スペイン

ギターを独奏楽器とする協奏曲。ホアキン・ロドリゴは、幼くして悪性ジフテリアのために失明した。しかし、8歳で音楽学校に入学し、ピアノ、ヴァイオリンを習うと同時作曲も学んだ。そして、26歳の時にパリに留学。ラヴェルやミヨーらの知遇を得て、彼らから大きな影響を受けた。この「アランフェス協奏曲」はスペイン帰国後の1939年に完成、初演は1940年、バルセロナで行われた。題名にあるアランフェスは、乾燥地帯の連なる中央スペインの中にあって、緑に恵まれたオアシス的な役割を果たし、古くからの王室別荘も建てられた観光地である。当初、スペイン民族楽派を継承したロドリゴが、18世紀的スペインの貴族文化と大衆文化とが結びついた時代を描き、スペイン内戦で疲弊した祖国への平和の願いを込めたと言われている。第1楽章は、妻ヴィクトリアと共に新婚旅行で訪れたアランフェスを巡った思い出をつづり、第2楽章には、初めての子どもを失ったときの悲しみや妻に対する慰め、神への祈りが込められているともいわれている。

第2楽章、Adagio アダージョ（ゆるやかに）、ロ音のエオリア調（教会旋法の一つ）、4分の4拍子、ロンド風の形式で書かれている。全体は、A-B-A-C-A の5つの部分からなるともいえるが、B,C がAに似かよっているところから、全体を5つの変奏曲ともみなすこともできる。第2小節からイングリッシュホルン（コール・アングレ）による有名な主題が演奏される。

## 「ノヴェンバー ステップス」 武満 徹 1930~1996 現代 日本

武満 徹は、日本を代表する作曲家で、現在の東京都文京区生まれ。主に独学で作曲を学んだ。21歳の時、若き芸術集団「実験工房」に参加。ミュージック・コンクレートなどの作品を発表。その後、映画「狂った果実」の音楽を担当するなど、映画音楽の分野でも活躍。その顎、この曲は、1959年に来日したストラヴィンスキーに高く評価された。これを契機に武満は一躍作曲家として名を馳せることとなる。また、1966年、指揮者として来日した作曲家のコープランドも武満の作品を絶賛。以降、世界を舞台に日本を代表する作曲家として数々の作品を残した。亡くなる直前は、フルートの名手オーレル・ニコレの70歳を祝いフルートのための「エア」を作曲・献呈。フルート、ハープ、オーケストラのための「ミロの彫刻のように」が武満の絶筆となった。

この「ノヴェンバー ステップス」は、1967年に、尺八、琵琶、オーケストラのために書かれた作品である。武満は、前述のとおり映画音楽の分野でも活躍していたが、その中で和楽器に触れ、さらに1966年 NHK大河ドラマ「源義経」の音楽で、その知見や体験を深めた。これらの経験から日本の伝統楽器と西洋のオーケストラとを組み合わせる考えにいたる。程なく小澤征爾が、武満のアイデアと彼が作曲した琵琶と尺八のための作品を、ニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督レナード・バーンスタインに紹介したところ、彼は同団の125周年記念委嘱作品のひとつとして、武満に日本の伝統楽器とオーケストラのための協奏曲を依頼した。こうして生まれたのが「ノヴェンバー ステップス」である。

タイトルは、1967年11月9日、ニューヨーク・リンカーン・センターにて初演されたこともあり、11月（ノヴェンバー）

にちなみ「ノヴェンバー ステップス」と名付けられた。また、楽曲構成が11段からなることも含んでいると言われる。最後のカデンツァの部分で、それぞれの楽器の名技が披露される。

一番気に入った曲を選び、その理由を下記のポイントを押さえて文章にまとめましょう。

『「レクイエム」から「ラクリモサ(涙の日)」』 モーツァルト(オーストリア)  
旋律、オーケストラと合唱の響きやテクスチャ等の音楽的特徴とその背景となる文化・歴史とを関連付けて聴き、印象に残ったことを書きましょう。

『エチュード ハ短調「革命」』 ショパン(ポーランド)  
リズム、速度、旋律、強弱の変化等の音楽的特徴とその背景となる文化・歴史とを関連付けて聴き、印象に残ったことを書きましょう。

『アランフェス協奏曲 第2楽章』 ロドリーゴ(スペイン)  
音色、旋律、ギターのアレンジ、オーケストラと独奏楽器の響きやテクスチャ等の音楽的特徴とその背景となる文化・歴史とを関連付けて聴き、印象に残ったことを書きましょう。

『ノヴェンバー ステップス』 武満 徹(日本)  
音色、和楽器とオーケストラの響きやテクスチャ等の音楽的特徴とその背景となる文化・歴史とを関連付けて聴き、印象に残ったことを書きましょう。

曲名「  
作曲者(

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

**3年 組 番 名前**

音楽コンクールの最高峰、ショパン国際ピアノコンクール

ポーランドのピアノ・コンクール。ショパンを記念して1927年に創始され、ワルシャワ（会場はワルシャワフィルハーモニー）で5年ごとに開催される。1937年第3回のあと、第二次世界大戦のため一時中断、1949年に再開され、1955年の第5回からは、当初の計画どおり5年ごとに行われる。ピアノ・コンクールとしては権威あるもののひとつ。コンクール出場資格は16歳以上30歳以下の年齢制限あり。

第2位入賞が 反田恭平さん 第4位が 小林 愛美 さんと二人の日本人が入賞しました！

課題曲があり、あらゆるショパン作品を課され、ショパン弾きとしての実力があらわになります。

まず、予備予選 164名が演奏

- ・指定のエチュードから2つ
- ・指定のノクターンまたはエチュードから1つ
- ・バラード第1番～第4番、舟歌、幻想曲から1つ
- ・指定のマズルカから2つ

※予備予選(2021年7月12日～23日)には、書類&音源審査に通過した164名が参加を許可されています。広義の意味の技術力が試されるショパンのエチュード、ポーランド人であるショパンの精神の理解が試されるマズルカ、そして中規模の作品の構成力や歌心が試されるバラード他で、ショパン弾きとしての素養が、いきなり全体的にチェックされることとなります。

この審査に通過したコンテスタントと、すでに発表されている予備予選免除者(指定のコンクールの上位2位までの入賞者)の計80名が、10月の本大会(2021年10月2日～23日)に出場できることとなります。

各ステージは、下記の課題曲、参加人数で行なわれます。

本大会【ステージ1】80名が演奏

- ・指定のエチュードから2つ
- ・指定のノクターンまたはエチュードから1つ
- ・バラード、舟歌、幻想曲、スケルツォから1つ

本大会【ステージ2】40名が演奏

- ・バラード、舟歌、幻想曲、スケルツォ、幻想ポロネーズから1つ
- ※ステージ1でスケルツォを演奏した場合は、それ以外から選ぶ
- ・指定のワルツから1つ
- ・アンダンテ・スピアナートと華麗なるポロネーズ、ポロネーズ Op.44、ポロネーズ Op.53、ポロネーズ Op.26 から1つ
- ・その他ショパンの作品で、演奏時間が30～40分となるようにする
- ※時間がオーバーした場合、審査員が演奏を止めることがある

本大会【ステージ3】20名が演奏

- ・ピアノ・ソナタ第2番、ピアノ・ソナタ第3番、24のプレリュードから1つ
- ・指定の作品番号のマズルカを1セット
- ・その他ショパンの作品で、演奏時間が45～55分となるようにする
- ※時間がオーバーした場合、審査員が演奏を止めることがある

【ファイナル】10名が1曲のみ演奏

- ・ピアノ協奏曲第1番、第2番のいずれか